

イケてる
センセイ!!
vol.19

福岡・私立筑紫女学園高校
英語科主任 教諭
ミラー智子先生

profile

佐賀県生まれ。佐賀・県立武雄高校卒。高校時代、書道の先生に「君は教師に向いている」と言われる。大学入試で自身が苦勞した経験から、生徒が苦しんでいるときに傍らで支えてあげられる教師の仕事に魅力を感じた。佐賀大学教育学部卒業後、筑紫女学園高校の教師となる。1988～89年、イギリス・ウォーリック大学修士課程で言語教育学を学ぶ。現在は英語科主任、高1の担任。

一度、灯がつけば生徒の学びの心は燃え続ける。 可能性を信じ、本物志向の人材育成を目指す。

「担当教科の英語の授業はもちろん、最近はHRも英語で話します」。生徒に“本物”を体験させるため、来年度から同校では米国の英語教育プログラムを導入する予定。その準備として現高校1年生にこの授業を実施したところだ。

課題解決のための議論を通して培う本物の英語力

ミラー先生が今、力を注いでいるのは来年度から導入予定のグローバル人材育成プログラム。米オレゴン州メルハーースト大学付属の英語学校 Pacific International Academy (PIA) が提供する英語研究プログラムで、日本に居ながらにしてアメリカの大学教育につながるプログラムが受けられるのが特色だ。「維持可能なビジネスと環境に関する事柄の中で生徒が興味をもつことをテーマに英語で話し合います。基礎的な英語力はもちろん、問題を解決しながら、それをビジネスチャンスに変えるにはどうすればいいのかという視点、維持可能な社会を構築しようとする姿勢を身につけさせるのが目的。高1全員の英語の授業に導入する予定です」

6月に先行して現高1生で実施した模擬授業では福岡という土地柄が明太子やラーメンといったローカルビジネスの活性化を話し合うグループが目立った。

「生徒自身が心から話したいと思うこと

を実際にやりとりすることで、本物の英語力も考える力も身につく。自分には興味も実感もわからないことを話題にするより効率的だと感じます」

英語しか話せないという状況であれば、何とか英語で伝えようとする。伝えたいと必死になる。「その気持ち、努力こそが社会に必要な力を自ら育むことになるのだと思っています」

模擬授業で手応えがあったため、同校では来年度実施に向けて後期も継続して現高1生でこの授業を行っている。

自分を変えたいと望む 生徒の力になるのが教師

入学式の日。ミラー先生は生徒たちに尋ねた。「自分を10枚のトランプカードとする。ポーカーのように何枚か捨てて新しいカードに変えられるとしたら何枚捨てる?」と。1枚も捨てない生徒はゼロ、平均5枚、中には10枚全部取り換えたいという生徒もいた。

「生徒自身が変わりたいと思っている証拠。その思いを応援するのが教師の

役目だと思います」

どんなにやる気のない生徒、将来に希望をもてない生徒も、ある時点で学びの心に灯がつけば彼女たちはずっと燃え続けると考える。「その灯がつきかけとして、教師にできることは本気でぶつかること。そして、チャンスや刺激を与えることだと思います」

女子校である筑紫女学園高校で教師生活をスタートさせた頃は「社会の第一線で活躍する女子を育てたい」と思っていた。最近は、卒業生と話していると、女子の力をより強く感じる。「女子にはグローバル社会や新しいことにポッと飛び出す勇気と軽やかな行動力がある。卒業生の活躍ぶりを見ての実感。自分の意思でさまざまな分野でチャレンジをしている子が多いんです」

教師として心がけているのは進路指導、生活指導の両面からのフォローだ。「悪いことをした生徒を叱る生活指導ではなく、基本的な生活習慣やマナーを身につけられるよう、一人ひとりを見ていきたい。特にマナーには厳しいです。社会で生きるうえでの基盤ですから」



高1を対象に実施したPIAプログラムの模擬授業。ふだんは英語に対する苦手意識の高い生徒たちからも「この授業を継続して受けてみたい」と好評だったそう。「いい刺激になるのは間違いない。これも生徒が学びの心に灯をともしつきかけになればと思っています」

fan message



ミラー先生は英語科主任として生徒に身につけさせたい真の英語力を見据えた取り組みを積極的に提案・実践しています。進路指導や生活指導においても、生徒一人ひとりを見つめ、適度に成長を促しつつ、必要な時にはじっと見守るといったバランスの取れた指導をされている。本校の教育をリードする存在です。(福岡・私立筑紫女学園高校 進路指導部長・友重雄一郎先生)